

いかにして「自己の内なる良心」に目覚めるのか ——ハイデガーのカント解釈の射程と問題——

小手川正二郎（日本学術振興会・明治大学）

時流や体制に盲従することも、超越的な観点に訴えることもなく、いかにして人は自己のよりよいあり方に目を向けることができるのか。言い換えれば、いかにして人は自己の内なる「良心」に目覚めうるのか。

この問いこそ、ハイデガーがカントと共に思考しようとしたものだと考えられる。事実、ダヴォスにおいて、道德主体による有限性の乗り越えをカントの倫理学に見て取るカッシーラーに対して、ハイデガーはカントの命法が有限な存在にとってのみ意味をもつことを強調し、現存在に対する道德法則の「内的」役割に光をあてようとしている。こうしたハイデガーの見方は、先立って『存在と時間』における「良心」論や『現象学の根本諸問題』（1927年夏学期講義）におけるカントの「尊敬」概念の解釈において、具体的に展開されている。ハイデガーの良心論が、良心の声にいかなる内容も認めない点で、道德法則の形式性を強調するカントの議論と接点を有することや、ハイデガーが『実践理性批判』の「尊敬」概念を重視し、そこに自身の良心論にも通じる、〈自己の内の自己ならざるものによって自己が触発される〉という自己触発のあり方を見出していたことは、すでに指摘されてきた。しかし、ハイデガーのこのような解釈や『存在と時間』の良心論が、カント自身の議論に比して、いかなる独自性をもつのかは充分考察されているとは言い難い。本論は、ハイデガーのカント解釈の要をなす、道德主体の「有限性」と自己触発としての「尊敬」という論点に絞って、ハイデガー自身の議論の射程を明らかにしつつ、それをカントの異なる解釈可能性との緊張において批判的な見地から考察し直すことを目的とする。

われわれは、まず『存在と時間』の良心論と『現象学の根本諸問題』におけるカント解釈を中心的に検討することで、ハイデガー自身の議論がいかなる点でカントの議論の延長線上に位置づけられるかを考察する。一方で、ハイデガーは道德主体の有限性を、世界に投げ入れられている現存在の事実性という見地から論究している。これは『実践理性批判』の「理性の事実」の議論を想起させる。カントは道德法則を意識することが、経験的な事実ではなく、純粹理性の事実であると述べているが、この特殊な「事実」への依拠は、良心現象の固有性を特徴づける、客観的には確証されえない「声」(Stimme)への依拠と同型をなすからだ。この並行関係のもと、『存在と時間』の現存在の事実性という問題系において、カントにおける道德主体の「有限性」の分析が、いかなる点で深められているのかを検討される。

他方、ハイデガーは、カントのいう「尊敬」を、経験的な水準にとどまらない「感受性」の働きとして捉え直し、自己が自己を触発するという逆説的な構造を理解する手がかりとしている。本論は、『存在と時間』の良心論における、呼ばれるもの・呼ぶもの・呼ばれる

先という三項関係との連関のもと、ハイデガーが道德主体の自律を感受性の次元で解釈した意義を究明する。

以上の解釈において、ハイデガーが自覚的にカントの「理性主義的」側面を縮減していることは明らかである。この縮減の意義を考察し直すためにも、カント自身の議論に立ち戻ることが必要となる。第一の論点に関しては、カントが「理性の事実 (Factum)」と呼ぶものが、証明不可能な前提でも直観されるしかない事態でもなく、あくまで「理性の活動の成果」を意味するという近年の解釈が参照される (P. Kleingeld, *Moral consciousness and the 'fact of reason'*, in: A. Reath and J. Timmermann (eds), *Kant's Critique of Practical Reason. A critical Guide*, Cambridge, 2010)。また、第二の論点に関しても、カントが尊敬感情にあくまで「限定的な」役割しか与えていない理由が再考される。このようにして、道德法則を意識し自律的な道德主体となるために、あくまで理性的能力の行使が不可欠だとカントが考えていた理由を明らかにし、ハイデガーの良心論の批判的吟味を試みる。その際、ハイデガーとは異なる形でカントの実践哲学を解釈したレヴィナスをとりあげることは有益であろう。事実、『実践理性批判』に取り組み続けたレヴィナスは、『全体性と無限』第三部でカントによる理性と意志の区別に立ち戻り、ハイデガーに抗して、理性を中心に据えた独自の「良心」(conscience morale) 論を展開している。カントの理性主義的側面を重視するこうした解釈やカント自身の議論との対比のもと、ハイデガーの良心論およびカント解釈が、冒頭の問いにいかなる形で答えうるかを吟味し直すことが本論の最終的な課題となろう。